

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 3 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520887

研究課題名(和文)成熟住宅地の持続的発展に向けた環境整備に関する地理学的研究

研究課題名(英文)The Environmental Improvement for the Sustainable Development of Matured Residential Area: From the View Point of Geography

研究代表者

香川 貴志 (KAGAWA, Takashi)

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70214252

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：少子高齢化の進展により、日本は成熟社会を迎えた。こうした状況のもと、高度経済成長期やバブル期以前に開発された住宅地では、各所で高齢社会にフィットしない環境が顕在化した。本研究では、日本の千里ニュータウン、中国・上海の田子坊、英国のレッチワース、カナダ・バンクーバーのオークストリートなどを取り上げ、成熟期を迎えた住宅地がいかに住環境の改善を図っているのかを比較検討した。結果、高齢者への対応だけでなく、若年世帯の転入を促す施策が持続的発展のためには欠かせないことが分かった。これらの成果は複数の国際学会で公表し、啓蒙的な図書や雑誌で積極的に公開して社会還元を図った。

研究成果の概要(英文)：Japan has just become to matured society with development of the declining birthrate and growing proportion of elderly people. Under this situation, the environment that does not fit to elderly people at any places. In this research, I considered how the matured residential area was planning for improvement of its residential environment. Senri New Town in Osaka Japan, Tianzifang in Shanghai China, Letchworth in England, Oak Street in Vancouver Canada and so on were picked up for this study. It does not necessary for only correspondence to elderly people but also for the policy which promote the moving-in of young household for the sustainable development of matured residential area. These outcomes were announced at international academic meeting (for example IGC) and these were published aggressively on educating books and journals.

研究分野：人文地理学

キーワード：成熟社会 少子高齢社会 成熟住宅地 ニュータウン 持続的発展 バリアフリー ユニバーサルデザイン 住宅再開発

1. 研究開始当初の背景

バブル崩壊後の長期不況下において、少子高齢化が想像以上のスピードで進展し、今や「化」が取れた少子高齢社会が現実のものとなっている。こうした社会情勢のもと、高度経済成長期～バブル期以前に形成された住宅地では、高齢者の生活にフィットしない構造的バリアが住戸の内外に多数出現し、社会ではバリアフリーやユニバーサルデザインに対する関心が高まってきた。

その際、共通する制度のもと日本国内において類似した改善策を比較するよりも、日本よりいち早く、あるいは少し遅れて少子高齢化を経験している諸外国の対応例から学ぶことが環境改善には極めて効果的であると考えられる。

2. 研究の目的

上の1「研究開始当初の背景」を踏まえ、日本に不足しているものを比較対象の諸外国都市の事例から学び、逆に日本が先進的である事例を諸外国に紹介して、今後の都市社会における生活環境改善のための方途を共有・提言する。

3. 研究の方法

地図や統計など、地域分析のための資料収集から取り組み始め、そこで不明なものについては、現地踏査やアンケート調査、インタビュー調査で補った。特に高齢化が著しい千里ニュータウンでは、第一世代の居住者（建設当初の入居者）へのインタビュー調査が困難になりつつあり、一刻も早い情報収集が不可欠である。

本研究の中心となる比較対象は、日本の千里ニュータウン、中国・上海の田子坊、カナダ・バンクーバーのオークストリート(41st St. ~ 46th St.)、英国のレッチワース田園都市である。他の予算も併せて比較参考地域としたオーストラリア・パースやタイ・バンコク郊外では十二分な成果が得られなかったが、千里、上海、バンクーバー、レッチワースでは、成熟住宅地がもつ個別の問題点のあぶりだしに成功した。そののち、これらの地域についての相互比較を行った。

4. 研究成果

本研究の成果は、アカデミックな学界内部にとどめず一般社会や行政に向けて発信することが社会還元として有益であると考え、学術専門雑誌よりも啓蒙的な書籍や商業誌での成果報告を心掛けた。また、日本における都市地理学の研究成果を海外へ発信するため、千里での研究成果をIGC 京都大会で発表し、それを英語書籍に所収される論文にまとめた。また、日本・中国・北アメリカの成熟住宅地や郊外がもつ持続的発展に向けた課題を比較検討し、上海で開催された国際シンポジウムで発表した（使用言語は英語）。ここでは、急激に成長している中国大都市の

郊外が数十年後に困難な地域になることを予測し、中国人研究者に一種の衝撃を与えた。それは徒歩での生活を基盤としていた中国の都市社会が、高層住宅居住と自動車や公共交通機関に依存した通勤社会へ変貌していることから想定される危機である。上海市内の田子坊や日本の千里ニュータウンでの聞き取り調査により、高齢者の生活空間は決して広くなく、むしろ自宅内やごく近所で完結していることが分かった。つまり、こういう状況に至った時に生活必需品を近所で購入できるかと問われれば、今の中国大都市はそのような状況にはない。居住者の大半が非高齢者である時代には見えない危機が存在することは、現在の千里ニュータウン（同様の事例は本研究で本格的な研究対象にしていない多摩ニュータウンでも認められる）。

千里ニュータウンと上海の他の比較対象地域では、英国のレッチワース（世界最初の田園都市だと云われている）が、かつての自律的な郊外都市からロンドンへの通勤者も珍しくない郊外都市へと変質している様子を見聞できた。現在のところ、無作為抽出による聞き取り調査、町役場や観光案内所での資料収集やインタビューに依存しているが、ここでも余裕ある住宅配置が高齢居住者にとっては様々な施設への近接性の低さにつながっていること、自動車が渋滞しにくいラウンドアバウト（日本式ではロータリー）が歩行者の横断の際に回り道を余儀なくすること、道路横断の際に歩行者信号が少ないことに不安を覚える高齢者にも出会った。

また、研究代表者が長年継続的に訪問して調査を続けているバンクーバーでは、研究協力者のDavid W. Edgington 教授（プリティッシュ・コロンビア大学）から有益な助言を得ることができた。それは、郊外諸都市の成長に対して、都市圏の中心都市であるバンクーバーの人口増加が沈静化し、相対的な地位低下が心配されているという懸念である。同じ懸念はバンクーバー市役所の都市計画課職員からも得ることができた。そして、こうした心配を払しょくする一環として、10戸前後の戸建住宅が30～40戸のタウンハウスに改築されるという民間主導の事業がバンクーバー市内の各所で行われており、その集積地域が今回バンクーバーでメインターゲットとしたオークストリートである。この地区での調査は現在も継続中であるため、まだ論文にまとめるには至っていないが、高齢社会とは関連性が高いバリアフリーやユニバーサルデザインについては、現地で詳しい観察や聞き取り調査を繰り返し、その成果を啓蒙的な雑誌に載せて世に問うた。

研究の過程では、関連する文献を積極的に読み、そのうち本研究に深く関連する著作については学術専門雑誌に書評を数本掲載した。その多くは書評とはいえ編集委員会による査読を経てから掲載されたものである。

ところで、本研究で明らかになった成果を

改めて簡潔に表現すれば「成熟住宅地は高齢者への対応だけに腐心するのではなく、若年世帯の転入を促す工夫をしなければ持続的な発展は望めない」となる。

それは高齢者コミュニティが消費低迷により活気を失い、介護ビジネスに特化したような社会へと変質していくからである。本研究では、高齢者の比率が高い成熟住宅地において、住宅の外部空間（屋外）でのバリアフリー化の徹底、住宅の内部空間（住戸内）における微妙な段差解消など、改善を要する多くの点を明らかにできたが、その一方で高齢者の日常生活行動圏がかなり狭いことも判明した。したがって、高齢者を対象としたバリアフリー化は同時に乳幼児にも優しいユニバーサルデザインに昇華させていく必要がある。また、コミュニティの持続的な発展のためには、国内外を問わず高齢者自身が若年世帯の転入による地域活性化を望む傾向にあることも分かった。

ただ、これを公的な計画で促進するのは難しく、千里やレッチワースで実施されているPFI事業（民間資金を活用した市街地再生）、千里やバンクーバーで確認できる資本の論理に基づいた民間主導の再開発事業が不可欠である。他方で、こうした再生事業が進展することにより経済的に恵まれない旧来からの居住者が暮らし難くなる事態は避けなければならない。当該地域を今日まで牽引してきた人々と若い転入者の相互扶助に基づくコミュニティが歩み始めたとき、はじめて長期的かつ持続的な発展が約束されるのではないか。

持続的な発展に向けた処方箋の第一歩は、若年世帯の転入を促すような住宅供給にある。バランスの取れた人口構成は当該地域の消費活動を活性化する。輪廻のように自己再生を繰り返すコミュニティを創出するために、地理学はもとより多様な研究領域で得られた成果をインテグレートしていく必要がある。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 6件)

1. 香川貴志 (2015)「バンクーバーで住宅地の変化を調べる」地理 60(9), pp.21-27.1 (査読無し、編集部による閲読制)
2. 香川貴志 (2014)「メトロバンクーバーのスカイトレインをめぐるバリアフリー対応とその課題」京都教育大学紀要 125, pp.103-115. (査読無し、図書館委員会による閲読制)
3. 香川貴志 (2014)「都市で暮らす象徴としての都心居住」地理 59(4), pp.14-22. (査読無し、編集部による閲読制)
4. 香川貴志 (2013)「シリーズ あの『地理の聖地』はいま：世界最初の田園都市レ

ッチワース・ガーデンシティ」地理 58(5), pp.4-9,表紙写真およびグラビア写真。(査読無し、編集部による閲読制)

5. 香川貴志 (2013)「チューリッヒの市街地再開発 西地区 イム・ヴィアドゥクト Im Virdukt の場合」都市地理学 9, pp.88-95. (査読あり)
6. KAGAWA Takashi, NEDA Katsuhiko and KOGA Shinji (2012) The research trends in Japanese urban geography. 人文地理 64(6), pp.497-520. (査読あり)

〔学会発表〕(計 7件)

1. KAGAWA Takashi (2015.06.06) Urban development and its problems in China, Japan and North America. The 3rd International Conference on China Urban Development, Urbanization and Urban Transformation in China (中華人民共和国・上海市、華東師範大学)
2. 香川貴志 (2014.10.11)「上海市黄浦区泰康路田子坊地区における居住空間と創意(創造)空間の商業化」2014年東北地理学会秋季学術大会(山形県山形市、山形大学)
3. 香川貴志 (2014.07.19)「成熟住宅地のバリアフリーとユニバーサルデザインを考える」平成26年度京都教育大学環境教育実践センター公開講座(於京都府京都市伏見区、京都教育大学環境教育実践センター)
4. 香川貴志 (2013.10.25)「メトロバンクーバーのスカイトレインにおけるバリアフリー対応とその課題」日本都市学会第60回大会(香川県高松市、サンポート高松)
5. KAGAWA Takashi (2013.08.07) The aged society in a suburban new town: What should we do? IGU Kyoto Regional Conference (京都府京都市左京区、京都国際会館)
6. 香川貴志 (2013.03.30)「郊外ニュータウン周辺の住宅開発と郊外ニュータウン内部の住宅再開発 千里ニュータウンを事例として」2013日本地理学会春季学術大会(埼玉県熊谷市、立正大学熊谷キャンパス)
7. Kagawa Takashi (2013.03.28) A proposal of the new tourism in mature society: observation for barrier-free correspondence in the daily life. 中日城市旅遊経済国際検討会(中華人民共和国・上海市、上海師範大学)

〔図書〕(計 7件)

1. KAGAWA Takashi (2015) The aged society in a suburban new town: What should we do? (in M. Hino & J. Tsutsumi eds. *The urban geography of post-growth society*, Tohoku University Press), pp.91-105.

2. 香川貴志 (2015) 「千里ニュータウン内外における住宅開発の特徴とその課題」(下記 所収), pp.189-204.
3. 香川貴志 (2015) 「ポスト成長社会における都市地理学の課題と今後の方向性」(下記 所収), pp.241-245.
4. 日野正輝・香川貴志編著 (2015) 『変わりゆく日本の大都市圏—ポスト成長社会における都市のかたち—』ナカニシヤ出版.
5. 香川貴志(2014) 「都市発達史的にみた日本のニュータウンの特徴と再生に向けた都市政策」(近畿都市学会編 『都市構造と都市政策』古今書院. 所収), pp.77-83.
6. 香川貴志 (2014) 「ニュータウンの再生 千里で何が起きているか」(藤井正・神谷浩夫編著 『よくわかる都市地理学』ミネルヴァ書房. 所収), pp.178-179.
7. 香川貴志 (2013) 「郊外とニュータウン」(人文地理学会編 『人文地理学事典』丸善. 所収), pp.362-363.

〔書評・文献解題〕(計 6件)

1. 香川貴志 (2015) 「書評 久保倫子著 『東京大都市圏におけるハウジング研究 都心居住と郊外住宅地の衰退』」人文地理 67-3, pp.269-270.(査読あり)
2. 香川貴志 (2015) 「書評 富田和暁著 『大都市都心地区の変容とマンション立地』」人文地理 67-2, pp.145-149.(査読あり)
3. 香川貴志 (2015) 「書評 牧野知弘著 『空き家問題 1000万戸の衝撃』」地理 60(1), p.104.(査読無し、編集部による閲読制)
4. 香川貴志・王琪薇 (2014) 「文献解題 主編：哈利・鄧・哈托格 (ed. Harry den Hartog) 『上海新城:追尋蔓延都市里的社区和身份』 (Shanghai New Towns: Searching for Community and Identity in a Sprawling Metropolis、上海のニュータウン 無秩序に拡大する大都市内のコミュニティとアイデンティティの考究)」人文地理 66(5), pp.443-445.(査読あり)
5. 香川貴志 (2013) 「書評 エベネザ・ハワード Ebenezer Howard 著 『黎明に向けて 本当の変革に至る平和の道 (To-Morrow: A Peaceful Path to Real Reform. Digitally printed version)』」地理科学 68(3), pp.100-103.(査読あり)
6. 香川貴志 (2013) 「書評 上野淳・松本真澄編著 『多摩ニュータウン物語 オールドタウンと呼ばせない』」地理学評論 86(2), pp.189-190.(査読あり)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0件)

取得状況 (計 0件)

〔その他〕

ホームページ等 = 作成していない

6. 研究組織

(1) 研究代表者

香川 貴志 (KAGAWA Takashi)
京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号 : 70214252

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

研究協力者

David W. Edgington (Professor,
Department of Geography, The
University of British Columbia)